

一、後の各問に答えなさい。

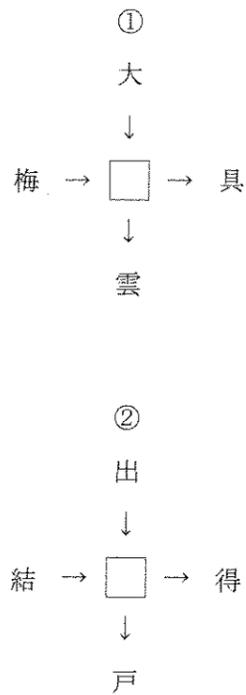
問一 次の①～⑤の傍線部を正確に漢字で答えなさい。

- ① 風邪でキカン支炎になる。      ② 古いカンシユウが残っている。      ③ 他人の失敗をセめる。  
④ 暑さで食べ物がイタむ。      ⑤ ミカイの土地。

問二 次の①～④の傍線部と同じ漢字が使われているものをそれぞれ記号で答えなさい。

- ① 相手の意コウにしたがう      ア、コウ層ビル      イ、作業のコウ程      ウ、書類で選コウする      エ、コウ上心を持つ  
② 意見をシ持する      ア、塀にシ柱を立てる      イ、先生のシ示を守る      ウ、会社の上シ      エ、公シを混同する  
③ 見トウが付かない      ア、提案内容を検トウする      イ、トウ選番号      ウ、健トウを祈る      エ、全体のトウ一  
④ 薬のゲ熱作用      ア、自己紹カイをする      イ、カイ送電車      ウ、社名をカイ称する      エ、規制をカイ除する

問三 ①・②について、例にならって、□に入る適切な漢字一字を入れて、熟語を完成させなさい。



問四 次の①～④の意味に合う熟語を、□の中の漢字を組み合わせて二字で答えなさい。ただし、各漢字は一回のみの使用とする。

- ① なしとげること。
- ② あるものがたどってきた道筋。
- ③ 根本的な法則。
- ④ あることをするのに都合の良いこと。

原 遂 宜 来 行 由 理 便

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、本文の表記を一部改めている箇所がある。)

人間が自ら体験して知ることに限りがあります。でも本を読んでいくと、知らない世界を、まるで目の前で見るようになっていくことができます。本によって「体験」できることも多いのです。本からどれだけ私はいろんなことを学んだらうか、とよく思います。

それほど、本というものには力があります。ここでは、本について考えてきたことをお話しします。

よく「人生を変えた一冊」という雑誌の特集がありますが、私の場合は、ひとつは、『続 地方記者』でした。小学校六年生のときに自宅近くの書店で小遣いで買った本です。新聞社の地方支局に配属された記者たちの仕事ぶり、その 哀歎を描いたドキュメントです。私は、ここに登場する記者たちの活躍ぶりに魅了されました。他社との抜きつ抜かれつの特ダネ競争のワクワク感。警察より先に事件の容疑者に接触してしまう記者のスリル。

これぞ人生だ。子ども心に感激し、「将来は地方で働く新聞記者になろう」と決意したのです。

当時、記者といえば新聞記者。テレビのニュースはほとんどなく、テレビ局にも記者がいることを知らなかったからです。大学四年生になって就職活動の過程で、「これからはテレビの時代かもしれない」と思うようになり、テレビ局を受験しました。そのテレビ局の記者は全員が地方勤務から始まることを知って、小学生時代からの夢である地方記者になれると思ったからです。

地方記者は、警察から検察、裁判所、市役所、県庁、日銀、農協……と、あらゆる経験を積むことができます。記者としての基礎基本を学ぶことができました。これが、いまの私を形作っていると思うのです。きっかけは一冊の本との出会い。まことに本は人生を変えるのです。

本が人生を変えるといえば、大学での衝撃的な出会いが、ショーペンハウエルの『読書について』でした。

一九六九年に大学に入ってすぐに、大学闘争でストライキになり授業がなくなり、自分で勉強するしかなくなりました。そのためには読書です。当時はI文庫の目録を見て全部読み尽くしたいと思っていたような学生でしたから、哲学、経済学、政治学の本などが多かったと思います。丸山眞男の政治思想分析に魅せられたのも、この頃です。

当時のI文庫は、値段が星で表示されていました。星一つが五〇円。星二つで一〇〇円。消費税はない時代です。学生でおカネがないですから、星一つの本をまず制覇して、次に星二つにいきこう、と 野望を抱いていました。星一つをコツコツ読んでいく中で出合ったのが、『読書について 他二篇』です(ちなみにいまは税抜きで五四〇円です)。

シヨープンハウエルは、旧制高校生が言っていたいわゆる「デカルト・シヨ」(デカルト・カント・シヨープンハウエル)の一人だし、その彼が語る読書論とはどんなものなのか。旧制高校生にでもなったような気分で見始めました。

【I】、数ページ目の「読書について」で、頭を殴られた気がしました。シヨープンハウエルは、こう書いています。

読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。習字の練習をする生徒が、先生の鉛筆書きの線をペンでたどるようなものである。だから読書の際には、ものを考える苦勞はほとんどない。自分で思索する仕事をやめて読書に移るとき、ほっとした気持になるのも、そのためである。だが読書にいそむかぎり、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。(斎藤忍随訳)

私は、本が好きで、本を読むとほっとしていたし、読書は勉強になると思っていたのですが、そうではないとシヨープンハウエルは断言するのです。【II】読書とは、他人が書いたものを読んでいるわけです。他人が考えたことを追いかけているにすぎないと言われても仕方がないのです。シヨープンハウエルはかなり毒舌家だとはわかっていましたが、ショックでした。

【III】、さらに読み進めていくと、読書を否定しているわけではないのです。本を読んでも、その後には今度は、自分でものを考える【X】がなければダメだ。ひたすら本だけ読んで賢くなった気持ちはなっていない、それは、自分でものを考える力がつくわけではないということを書いてあります。

……これこそ大多数の学者の実状である。彼らは多読の結果、患者となった人間である。

精神も、他人の思想によって絶えず圧迫されると、弾力を失う。(中略)だが熟慮を重ねることによってのみ、読まれたものは、真に読者のものとなる。食物は食べることによってではなく、消化によって我々を養うのである。それとは逆に、絶えず読むだけで、読んだことを後でさらに考えてみなければ、精神の中に根をおろすこともなく、多くは失われてしまう。

しかし一般に精神的食物も、普通の食物と変わりはなく、摂取した量の五十分の一も栄養となればせいぜいで、残りは蒸発作用、呼吸作用その他によって消えさせる。

シヨープンハウエルは、食べ物と栄養というたとえで説明していますが、私は、そうか、本を読むということは、言ってみれば、ザルで水を汲むのに似ているということだな、と自分なりに解釈しました。

読んだそのときは、なるほどなと感心するけれども、すぐに水(知識)は、ザルの目の隙間からこぼれてしまいます。つまり、忘れてしまうのです。【IV】、大量に本を読んでも、ザルでも大量に水を汲んでいけば、少しは水がたまりまゝ。読書の役割とはそういうものかもしれないと思いました。

同時に、【五十分の一の栄養】とシヨープンハウエルが書いている、残った【Y】について、考えることを自分はしていないな、とも思いました。

読書がなければ教養は身につかないけれども、読書しただけで教養が身につくわけではない。これをシヨープンハウエルが教えてくれたのです。

深く感動した本や、自分にとって意味があると思った本については、次の本にすぐに行かないで、しばらく余韻に浸るといことが大事なのです。その後で、著者は、何を言いたいのか、そこから自分は何を得ることがあるのかと考える時間を持たなければいけないのです。

(池上彰『学び続ける力』より)

【注】 ※1 日銀……日本銀行のこと。

※2 農協……農業協同組合のこと。

※3 シヨープンハウエル……ドイツの哲学者。

※4 ストライキ……要求を実現するために業務を一時停止すること。

※5 丸山眞男……日本の政治学者、思想家。

※6 旧制高校……一九五〇年以前の高等教育機関。現在の大学に相当する。

※7 デカルト……フランスの哲学者、数学者。

※8 カント……ドイツの哲学者。

問一 空欄Ⅰ～Ⅳに入る接続語のうち、その役割が明らかに異なるものが一つある。それを記号で答えなさい。

問二 空欄 X・Y に入る最も適切な言葉を本文中より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問三 二重傍線部 A～D の語句の本文中における意味として、最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 哀歎

ア、あわれみとよろこび      イ、かなしみとよろこび  
ウ、くるしみとかなしみ      エ、さびしさとかなしみ

B 野望

ア、野蠻な望み      イ、不屈きな望み  
ウ、大きな望み      エ、夢のある望み

C 毒舌家

ア、しんらつな皮肉や悪口を言う人      イ、独特な思想家  
ウ、毒々しい表情の人      エ、おしゃべり屋

D 余韻

ア、余りある印象      イ、耳に残る音の響き  
ウ、とまどう感情      エ、あとに残る味わい

問四 傍線部①『将来は地方で働く新聞記者になろう』と決意したのです」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、新聞記者の働きを目の当たりにしたような小学生時代の読書体験は、自分の将来を考えるきっかけとなったから。  
イ、もともと興味のあった地方記者の仕事内容とその魅力を知り、自分の将来に明るい希望を確信するに至ったから。  
ウ、本の中の記者たちの仕事ぶりに大きな刺激を受け、将来の充実した記者生活にあこがれを持つことになったから。  
エ、他社との競争や容疑者との接触など、まるでドラマのような世界に驚くとともに、記者の生き方に感動したから。

問五 傍線部②「これが、いまの私を形作っていると思うのです」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、小学生の時に読んだ本を通して学んだ記者のあり方は、その後大学生の時の就職活動にも大きな影響を与え、その活動の中で得られた地方での人々との出会いが記者としての自己を形成したから。  
イ、テレビを通じたニュース発信がほとんど無い状況で、地方のことをいかに多くの人たちに知ってもらうかということが目下の問題意識であり、就職後の地方勤務でそのことが実現したから。  
ウ、新聞記者になることを目指し、とりわけ地方記者に配属されることは、都心では分からないあらゆることに対する見聞を広げることになり、新聞記者としての充実感を得ることができたから。  
エ、大学時代の就職活動をしていく中で、テレビ局での勤務にこそ自身が希望する記者像の可能性を見出し、実際、現場での経験を通して、記者としての基本を身につけることができたから。

問六 傍線部③「自分でものを考える力」とあるが、この内容を言い換えている表現を、この傍線部の後より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④「五十分の一の栄養」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、読書と現実の体験を結びつけることで自分の価値観を豊かにできるが、それは現実の生活には役立たないこと。
- イ、本を読むことで得られる心の満足とたくさんの知識は、時間の経過とともにほとんど忘れさられてしまうこと。
- ウ、多くの本と出会い、読書体験を積み重ね、たくさんの知識を得ることで、いくらかの知識が身につくということ。
- エ、真の意味で本を読むと、そこで得た知識は精神の中に根をおろすが、それは一部の学者にしかできていないこと。

問八 本文の内容の説明として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、心を落ち着かせ、勉強になるという読書に対する一般的な認識を、ショーペンハウエルはその著書において捉えなおす主張を展開している。
- イ、ショーペンハウエルは、読書することが他人の思考過程をなぞるだけではなく、自分の考えを捨てることにもつながると述べている。
- ウ、読書は他人の思考をたどることであり、読者に主体的な思考を求めるものになっていないということを、ショーペンハウエルは指摘している。
- エ、ショーペンハウエルの読書論では、単なる多読を否定し、読書行為が読者の思考と結びつくところにその意味を見い出している。

問九 波線部「読書がなければ教養は身につかないけれども、読書しただけで教養が身につくわけではない。」とあるが、それはどのようなことか。筆者の主張が分かるように六十字以上八十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も字数に含むものとする。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二月になって、天候は冬に逆戻りしてしまった。暖かな日の多かった一月に比べ、身を縮めるような寒い日々が続いていた。今日も寒い。深雪は空を見上げた。暗く厚い雲が覆い、さつきから白い雪片がちらつき始めた。午後一時だというのに、足元の水溜りは凍ったままだ。

「もうすぐスタートだね」

隣で、茉莉がつぶやく。ものを言う度、息は白く口から立ちのぼった。

深雪は、自分の指に息をはきかけた。小さい頃から、なぜか手袋が嫌いで、めったにはめない。

「寒くない？」

深雪の指先を見つめて茉莉が、たずねてくる。

目の中の、市役所広場には、ロードレースに参加する選手達が集まっていた。ほとんどが、ランニングスタイルだ。見ているだけで寒くなる。毎年開かれる市主催のロードレースに、今年は、真吾を含めた陸上部の長距離ランナー数人が、参加していた。陸上部顧問の小泉先生が、部員を集め、「a」顔でなにか言っていた。その輪の中から、ふいに真吾が抜け出て、近づいてくる。

「友よ。応援感謝。あれっ、千博は？」

「塾の模擬試験。終わり次第かけつけるって」

茉莉の言葉に、真吾はおおげさに肩をすくめてみせた。

「友情より模擬試験をとるなんて、おれは、裏切られたわけだ」

「なにおおげさなこと言ってるの。たかが五キロのロードレースくらいで。真吾の目標は、富士山でしょ」

「綾部、わざとボケてんのか？ 箱根だよ、箱根」

深雪がくすつと笑った時、競技五分前のホイッスルが鳴った。真吾が、つけていたリストバンドをとる。鮮やかな深紅だ。

「これ、持っててくんない」

「え？」

「おれの今週のラッキーカラーは、赤なんだ。でも今、綾部の顔を見て思った。占いなんか頼らない。実力で、トップゴールしてみせる」  
「苺野、なにしてる」

小泉先生がどなる。片目をつぶり、真吾は、選手の中に戻っていった。

II

深雪は、手の中の深紅のバンドを軽く握りこんだ。

「真吾くん、深雪に持っていてほしかったんだよ。そうしたら、勝てそうな気がしたんだよ。それに、リストバンドってこうすると、暖かいんだよ。ほら」

茉里は、深雪の手にリストバンドをはめた。<sup>①</sup> 深紅の布の上に雪が落ち、すぐに小さな水の一滴に変わった。

スタートを告げるピストルの音が響く。大きな塊かたまりになって、選手たちが走り出す。通り過ぎる時、真吾は、「b」Vサインをしてみせた。

「近道して、三キロ地点のコンビニ前に行ってみようか。千博くんもそこに来るって言ってたし」

茉里は、深雪の背中を軽くたたいて、「。【】歩き出した。真吾の走るのは、市役所をスタートし中学校にゴールする五キロのコースだった。

「茉里ちゃん」

白いコートの茉里の背中に呼びかける。茉里はふりむき、問うように首をかしげた。

「私ね、真吾のこと、いいやつだと思うよ。けどさ……」

言葉がつまる。何を言いたいのかわく、わからない。深雪は、リストバンドを握り締めてみた。茉里がふいに、笑顔になった。

「それ、真吾くんのこと嫌ってないってことだよ。喜ぶよ、真吾くん」

III

真吾のことは、嫌いじゃなかった。この数ヶ月、かなりの時間をいっしょに、すごしてきた。真吾は、思っていたほど、軽薄でも無責任でもなかった。いっしょにいて気持ちのいい人間だった。嫌いじゃない。でも、好きというのとも違う気がする。

『真吾くんのこと好きだった』

十月の図書室で、栗坂美希は、そう言って泣いた。それが愚かだとは思わない。でも、人を好きになって泣くことが深雪には、よくわからなかった。人を好きになる。そこにまわりついてくる色々な感情が、どちらかというと、うっとうしかった。

「私って、変なのかな？」

つぶやいたつもりだったけれど、茉里には聞こえたらしい。

「深雪、変てどういうこと？」

逆に問われて深雪は答えが返せなかった。茉里があかねと言った。

「あかね、なにが変なのか、わかんないよ。お姉ちゃん、一人暮らしするって家を出て行ったんだけど、今まであんまりまともすぎたから、今度からは、変になるんだって言うの」

「お姉さんが？」

「うん、ずつといい子やってきたから、もうイヤだつて。まわりが、変だ、おかしい、ダメだつて言うことは、絶対しなかった。自分がやりたくても我慢した。それが悔しいんだつて言うの。わたしね、よくわかんないけど、変でもいいのかなつて、そのとき思ったの……あつ急がなくちゃ」

茉里が歩き出す。深雪は、深紅のリストバンドに触れてみた。

コンビニの前、千博が立ってた。二人をみつけ微笑む。

「千博くん、どうだった、試験？」

「それが英語で、ランナーつて単語が出てきたんだ。とたん、真吾の顔がちらつちやつて、<sup>②</sup> どうも問題に集中できなかつたな」

「なに、それ？」

深雪は、千博の顔をのぞきこんでしまった。茉里が笑っている。

「あつ、きた」

後ろで、誰かが叫んだ。遠くに選手たちの姿が、現れたのだ。

「あついるいる。真吾」

千博が、大きく手をふる。茉里がへえと声を出した。

「なに、茉里ちゃん？」

「うん、千博くんがあんな大声出して、手をふるなんてうそみたい」

「そういうえば、興奮するタイプじゃないよね」

深雪と千博が出会ってからまだ一年にならない。その時間の間に、確かに、千博は変化したと思う。<sup>③</sup> 誰かに、なにかに出会いながら変化していく。千博だけでなく、同じ年の自分にも確実に変わっていくところがあるのだろうか。

「しんごー」

千博の音が響く。

「荻野、いいぞ、手がふれてる」

いつの間に来たのか、小泉先生の大声がそこに重なる。真吾は、先頭集団の中にいた。汗が光り、頬が赤くそまっていた。しかし、表情の乱れはなく、【d】走っている。

「ペースをあげろ」

小泉先生が口到手をあてて叫ぶ。真吾が前に出ようとした時、横の選手のひじがあたった。真吾がわずかによろめく。茉莉があつと声をあげた。深雪は、一步、前に出た。

「しんごー。がんばって」

真吾が集団から抜け出していく。素人の深雪の目にも、地を確かに蹴る足取りや安定したリズムがわかった。みるみる、真吾と集団の差が開いていく。深雪は、走る真吾の姿に鼓動が速くなったのを感じた。あんな風に走る人間を初めて見たと思った。<sup>④</sup>今まで知らなかった真吾を見つけたような気がした。

「あまるほど才能はあるんだがなあ。足りないのがおしい」

小泉先生が、腕をくんでうなる。

「なにが、足りないんですか」

千博と茉莉が、同時にたずねた。

「真面目さ」

短い答えが、返ってきた。

小泉先生は、中学校まで車にのせてくれた。かなりの人が集まっていた。校庭の真ん中でゴールとかかれた旗が、風にはためいている。

「莉野は、いいんだ。走るための天性の力を持っているんだ。生まれながらのランナーだと思っただがなあ」

小泉先生がため息をついた。

やがて、真吾の姿が校門の前に見えた。思っていたより、ずっと早い。

#### IV

小泉先生がうなずく。

「しんごー、ぶっちぎりだぞ」

千博が叫ぶ。その時、真吾の身体がぐらりとゆれた。ざわめきがおこる。真吾の表情がゆがんでいた。さっきのゆとりは、どこにもない。顔をしかめ、肩で息をしている。また、身体がぐらりとゆれた。思わず大きな声を出していた。

「真吾、がんばって」

校庭に集まった人々からも声援がとんだ。拍手もきこえる。その視線と声援の中、真吾は走りきり、深雪たちの目の前で、ゴールテープをきつた。ひととき大きな拍手がおこる。

<sup>⑤</sup>小泉先生が、大の字にたおれている真吾に近寄り、ランニングシャツをもって引つ張り起こした。

「莉野、いいかげんにしろ。なに、かっこつけてんだ」

「あれ、見破られちゃった」

「おれが何年、陸上部顧問をしてると思っただ。お前が五キロの走り、へばるタマか。まったく下手な芝居をして。こい、ストレッチだ」  
小泉先生に引つ張られながら、真吾は、深雪たちに手をふった。千博が苦笑する。

「まったく、余裕だな、あいつ。ほんとに、ふざけるのが好きなんだ」

「ちがうよ」

深雪の言葉に千博が、えっと深雪の顔をみつめた。

「真吾、ふざけてなんかいないよ」

そう思う。真吾は、決して楽に走ったわけじゃない。誰より真剣に必死に走ったはずだ。ふざけていて、あんな力強い走りができるはずがない。真吾は、自分の真剣さや真面目さを他人にさらすのがいやなのだ。<sup>⑥</sup>自分の中にあるものを素直に見せられないのだ。わかる気がする。自分もそうだと思う。好きとか嫌いといった感情とはたぶん別の、しかし、強く鮮やかな思いをかみしめる。

深雪は、吹き付ける風に向かって顔をあげ深く息をすった。

(あさのあつこ『13歳のシーズン』より)

問一 空欄【a】と【d】に入る言葉として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、手をあげ      イ、険しい      ウ、淡々と      エ、足早に

問二 空欄 I と IV に入る会話文として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、嫌いじゃないよ……

イ、あつちに比べればね、寒いなんて言ってもらえないって感じ

ウ、うん、いいタイムだ。記録もんだ

エ、まったく、頼らないんなら、初めから、してこなきゃいいのに

問三 傍線部①「深紅の布の上に雪が落ち、すぐに小さな水の一滴に変わった」とあるが、この日の天候の様子を具体的に表した一文を本文中から抜き出し、はじめの五字を答えなさい。

問四 傍線部②「どうも問題に集中できなかったな」とあるが、「千博」がそのように言ったのはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、またとない真吾の活躍ぶりを見て応援しなければならぬのに、模擬試験を受けざるを得なく、せつかくの貴重な機会を逃してしまつたという後悔があったから。

イ、真吾をはじめとしてロードレースに参加する陸上部員の頑張りを見届けたいと思うと同時に、模擬試験の受験も希望しており、どちらを選ぶか迷っていたから。

ウ、真吾との友情を優先して考えたいと思っっている一方で、それをまわりに悟られまいと塾に行くことにしたが、真吾に対する裏切りという後ろめたさがあったから。

エ、真吾が出場するロードレースを見に行こうと思いつきながら、塾での模擬試験を受けているということもあり、全神経を解答に向けることができなかったから。

問五 傍線部③「誰かに、なにかに会いながら変化していく」とは、どういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自身が予想もできないような体験や人々との出会いを通して、自己存在が確立していくこと。

イ、何気ない日常の中にある出来事を通して、自己と他者が共に影響し合つて協力していくこと。

ウ、様々な人との出会いや体験を通して、新たな自己の認識や行動がつけられていくということ。

エ、めまぐるしく変化する人との出会いや出来事を通して、変わらない自己が形成されていくこと。

問六 傍線部④「今まで知らなかった真吾を見つけたような気がした」とあるが、それは「深雪」のどのような気持ちを表しているか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、茉里や千博に対して表面的にみせる真吾のおおげさな言動に無責任さを感じていたが、懸命に走りトップをねらおうとする姿から真吾の実直さを感じられた。

イ、日頃からまわりの人たちとの関係を大切にしている真吾の態度に感心していたが、レースで集団を引き離そうと走る姿から真吾の闘争心をかいま見た。

ウ、軽薄ではないが責任感が強くもない真吾の様子とは違い、安定したリズムと速さで走る姿から真吾の走ることに對するこだわりのようなものを感じ取れた。

エ、普段の真吾がみせている明るく調子の良い振る舞いとは別に、力強く走る姿から真吾のレースにかける真剣な思いを感じとることができたように思えた。

問七 傍線部⑤「荻野、いかげんにしろ。なに、かつこつけてんだ」とあるが、「小泉先生」がそのような言ったのはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、小泉先生は、頑張つてゴールテープを切った真吾をほめるのが恥ずかしくて、その照れ隠しをしたから。  
イ、真吾がゴール後に倒れ込んだことを、小泉先生は真吾のポーズだと思い、注意する気持ちがあったから。  
ウ、真吾が一番にゴールしたものの、たった五キロの距離でへばってしまったことに落胆してしまったから。  
エ、小泉先生は、五キロのレースを全身全霊で走り抜いた真吾をねぎらい、かつ勇気づけたいと思ったから。

問八 傍線部⑥「自分の中にあるもの」とあるが、それはどのようなものか。「深雪」と「真吾」について、それぞれ本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問九 この作品の内容の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、深雪の視点を中心に物語が展開し、茉里とのやりとりや千博の真吾を応援する姿、真吾の走る様子などを通して、深雪自身が自分の内面を改めて客観的にとらえ返すに至るまでが描かれている。

イ、深雪、茉里、千博、真吾のそれぞれの心情が細かく語られながら物語が展開し、それぞれが様々な出来事を通して悩みを繰り返しながら、子どもから大人へと成長していく姿が描かれている。

ウ、情景描写とそれぞれの登場人物の心情描写が効果的に結びつけられながら物語が展開し、感情を表にあらわすことのできなかった千博が、真吾との出会いによって変わる姿が描かれている。

エ、自分の気持ちを素直に語ることでできない深雪と、常に親身となって相談にのる茉里の姿を中心に物語が展開し、真吾の真面目な姿に感動した深雪が心を開いていくまでがいていねいに描かれている。

オ、深雪と茉里とのやりとりを中心に、現在から過去にさかのぼるかたちで物語が展開し、過去の真吾や千博に関わるエピソードが、現在の深雪の自己認識に影響を与え続けている様子が描かれている。

